

## 所感

専門委員 手塚 寿 男

「おもひ」に「火」を懸ける。『古今集』巻一九に「俳諧歌」が五八首ある。俳諧は滑稽の意で、古今集の俳諧味は、懸詞や縁語を滑稽的な技巧として用いている点、卑俗な語句を用いている点、擬人的手法を用いている点にあることが指摘できる。

(2) 甲斐における生活を反映している和歌

かひのくにへまかりける時に、みちにてよめる。

夜をさむみおくはつしもをはらひつつ草の枕にあまたたびねぬ

(「羈旅歌」四一六みつね)

かひのかみに侍りける時、京へまかりのぼりける人につかはしける。

宮こ人いかにととはば山たかみはれぬくもゐにわぶとこたへよ

(「雑歌下」九三七をののさだき)

しほの山さしでのいそにすむ千鳥きみがみよをばやちよとぞなく

(「賀歌」三四五)

塩の山や差出の磯に住んでいる千鳥はあなたの寿命が八千代まで続きますよと、ちよちよ鳴いていることだ。塩の山は山梨県塩山市、差出の磯は同山梨市にある。塩の山は笛吹川の東岸にあり、差出の磯は西岸にあって笛吹川はその中央を流れている。昔から風景の名所として知られている所である。

以上は上代文学と中古文学(『古今和歌集』)について、作品をかかげ解説したのであるが、歌謡や和歌が古代の作者の感情を素直に表現しているのを深く感ずる。『甲府市史』の中にこのような文芸が豊かに取り挙げられているのは嬉しいことだと思う。それに付けても編さん室に苦心して集められた編纂資料を整理して図書館とし、甲府市のみならず、県下県外の研究者の研究に貢献することを願ってやまない。

いままでに關係してきた自治体史(誌)はいくつかあるが、調査・執筆しているうちに親近感が深まり、新聞の地域別欄にいち早く目が行くようになった。甲府市の場合は、市史編さん委員会専門委員を拝命したのが昭和五八年(一九八三)七月一日であるから、現在までの約一〇年間は、私の生涯のうちの重要な一部となっている。大正一二年(一九二三)の関東大震災より少し前、まだ学齢に達していなかった私は祖母につれられて、新紺屋町で豆腐屋を営んでいる親類に二、三泊したのが、甲府の町に触れた最初であった。盛り場の様子などはほとんど記憶にないけれども、鉄道馬車に乗せてもらったことと、親類の家には同年の女の子がいて、「イキンセイ」などと発音しながら話すのをひどくハイカラに感じたことだけはあざやかに覚えていいる。昔勤番の武士が甲府の娘をからかって、くるわ言葉を教えこんだ名残であるとわかったのは大分後年であるが、庶民の歴史を重視する『甲府市史』の執筆に一〇年前から参加できたことに、何か因縁めいたものすら感ずるのである。

『甲府市史』の既刊一四巻のうち、私がタッチしたのは史料編第二、五巻と通史編第二巻であるが、それらの執筆を終えて発刊されたのちに、正誤表と年表の作成を担当したことは、近世関係全五巻をおよそ二、三回ずつ読む機会を持つことになった。それを通じてのおおまかな印象としては、鋭利な論述のみのコンペイトウ型ではなく、ふっくらとした老舗の饅頭になぞえられるような市史になっている。